

梅鶯仏教壮年会報

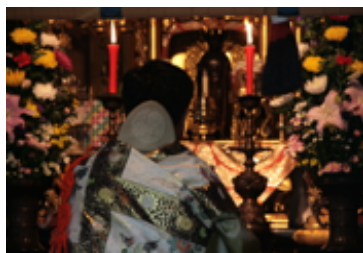
第101号
2012年
11月4日

法輪寺（梅鶯仏壮協賛）

親鸞聖人七百五十回

大遠忌法要を厳修

去る十月六日に、法輪寺門徒と梅鶯仏壮会員の協力のもと、無事、大遠忌法要が厳修されました。やなせななさんコンサートと共に、得難いご勝縁となりました。



この世の旅の 往く先きに
待っていてくださる 如来へかた
そんな幸わせ 感じてますか？ がある

11月10日・11日に梅鶯仏壮の聞法親睦旅行が実施されます。

今回は東京築地本願寺の報恩講に参拝します。

梅鶯仏壮十周年の

思い出

そしてこれから

副会長 森勝昭



梅鶯仏壮は、平成十五年六月一日に第1回総会を開き、決意も新たに結成されました。

会員9名、賛助会員（仏婦）4名、合わせて13名でのスタートでした。

結成の目的は、共に一念仏を悦び、互いに親睦を深め合うこととして、滋賀教区仏壮の綱領にも、

「壮年会は、自ら生き方を親鸞聖人のみ教えに聞き、共に一念仏申す朋友の輪を拡げ、心豊かに生きる社会の実現をめざします」とあります。

「目的・綱領」とは、自分たちの進むべき方向を示しますが、自分だけが心豊かに生きることがではなく、朋友という言葉が、自他共に目指していく道であることを示しています。

このようにして、私は仏壮会員として皆さんと共に歩いてきました。

最初は、おつとめも満足に出来ないことや、正信偈の意味も分

らない自分がなさけなく思いました。

梅鶯仏壮に入会してからは、おかげさまで少しは理解できたのかと有難く思っています。

例会の練習、仏教讃歌の練習など大いに勉強になりました。

現在続いています『正信偈を味わう』では、「帰命無量寿如来」に始まり、今は七高僧の一人「源信広開一代教」まで進ん

できました。

法輪寺住職さまの分かりやすい解説のおかげです。

このようにして、二ヶ月に一度の例会ですが、有難く仏縁に遇える喜びでいっぱいです。

梅鶯仏壮は、10年の節目を迎え、この10年を草創期として、これから10年を充実期として（私が思っているだけで

す）、これから長く続けるために、欲張らず、背伸びせず、普通のそのままでいいと思っ

ています。

合掌

題材法話

※前号からのつづき

源信和尚にはこんなエピソードもあります。

○真の愛情のきびしさ

源信和尚が庭で草を食べ

ている鹿を追ひ払ったのを

見て、弟子が「なぜ無慈悲

なことを」と聞いた時、や

が「鹿が人に馴れれば、ま

う」と応えたそうです。

「まことの慈悲や優しさ

は「痛みが伴うものだ」と

いうことです。これは前号

で述べた愛し子からの贈り

物を突き返した母のエピソ

ドとも共通します。

「親が子供に欲する物と与

えるだけが愛情ではありま

せん。子供に掛ける真の愛

情には厳しさや、時には痛

みが伴うのです。現代社会



が陥りやすいあやまちのよ

うに思えます。

○あらゆるお経から

源信広開一代教

偏帰安養勸一切

源信和尚は広く仏

教全般にわたる教えを学ば

れた上で、ひとえにお浄土

の教えに帰依し、あらゆる

人々に勧められた。『天台

源信和尚はもとともと天

仏教（聖道自力門）を学ば

れた方ですが、最終的にた

どりで着かれたのが念仏往

の道でありました。お釈迦

様の「往生要集」は、お釈

引の説かれたお経などから

上もあるといわれます。

ゆへにこれだけでもいかにあ

るお経を結集して、浄土

往生の道にたどり着かれた

のがうかがわれます。

○自力と他力

「本願を信じて念仏を称え

る」「専修」の心と、自力の

行を頼って往生を願う「雑

修」の心とでは、どちらが

浅いか深いかを判別し、専

修の人が往生する浄土と、

雑修の人が往生する化土と



生すると信じて、ただただ

報恩のお念仏を称えること

で、「雑修」とはお百度参

りや写経をしたり、神や仏

に祈願すること、救われよ

うとする心、これは、阿弥陀

様の本願を疑う心のお浄土

われであり、真実の心であ

には往生すること、出来な

いと説かれ、すべての者に

専念仏を勧められたので

す。

○仏はつねに照らします

極重悪人唯称仏

我亦在彼摄取中

煩惱障眼雖不見

大慈悲無倦常照我

「極めて重い罪をつくつて

いる私たちが、ただ仏の名

を呼ぶだけで、阿弥陀仏の

取の中にいるのです。自ら

の煩悩によつて眼がさえぎ

られて、阿弥陀様を見るこ

ができません。が、常に私を



集の中で胸に響く言葉とし

て述べられました。

にそれを親鸞聖人が高らか

4句です。

の眼には見えなくても、ほと

（意訳版）は、私自身もそ

うですが、どれほど多くの

方に感動と歓喜を与えてき

たことでしょうか。

よく親と子の関係に喩えら

れます。

「子供は他人でも代わるだけ

が、子供を思う本当の親の心

は、言葉や行動ではあらわ

すことのできない、ひたす

よう。子供の幸せを願う心で

悲しむ子供のそばで、黙

つて泣きながら手を取り、

共に涙を流すことのできる

心です。

あさん」と親の名を呼びま

す。つまりそれが「南無阿

弥陀仏」と阿弥陀様の名を

呼ぶ私のお念仏なのです。

7月例会住職法話よ